

岡村道雄著<旧石器時代：捏造事件>「おお そのはなしの本か」「ま いいか」と棚から持ち帰り、いっきに読んだ。えかきでいえば“贋作”とか“ヒトの作品のパクリ”ということか、普通、こういうことはしないね。

前にも書いたが、日本列島には3万年前までの遺跡がいくつか発掘され国内はもちろん海外からも認知されている。ところが3万年より以前の「“前期旧石器時代”があるはず、あってほしい」という学説がふつふつとある「その時代日本は大陸と陸地で繋がっていた 大陸に住むゾウやシカやワニの骨が出土している その動物たちと一緒にヒトが日本に来ていてもおかしくない その時代の遺跡があるはずだ あってもおかしくない」という考えが渦巻いていた。そんな時に、藤村がどこかから石器を持ってきて発掘現場に埋めた、そのあと「でてきた」と声を上げる、「うわあすごい」と騒いだのは現場責任者「あるはず、あってほしい」といつていた学者の先生、自治体もマスコミも、ついには教科書を塗り替えるまでになった、日本中が大騒ぎになった「日本もすごいんだ」ということになった。3万年以前が10万年前、20万年前という数字に膨れ上がった。毎日新聞記者が「ちょっとおかしい」と発掘現場にカメラを仕掛け石を埋める藤村の映像を写して詰め寄った。最初は「ちょっとだけ」の告白が「15年 北海道から岩手・宮城・福島・群馬・埼玉各県で 計42箇所の遺跡で捏造した」ということになった、

著者の岡村先生の師が「あるはず、あってほしい」という学説の先生だった、そんな影響で自分も「あるはず、あってほしい」と思っていた。藤村は発掘好き考古学のマニヤ、だが「岡村主導の現場で素人の藤村が石を埋めた」ということで「ぐるじゃないのか」と世間から相当たたかれたらしい。本にはいくつかの現場のはなし、なぜ自分までだまされたのか、なぜ真剣に検証しなかったのか、当時「おかしい」と疑問視する論文もいくつかあったが無視してしまったことなどが語られている。発覚後、藤村は病院関係に守られ個々の検証できなかった。どこから石を持ってきた、どうして石を製作した、捏造をした場所、しなかった場所というようなたくさんの疑問にも答えられないヒトになっていた。YESであったかもしれない遺跡もNOが突きつけられ、日本の3万年以前は今のところ消えてしまった。

本より：“最高の瞬間”1980年4/20日曜日この年最初の第53回石器文化談話会（18人参加）であった。遠藤・藤村の先導案内で座散乱木遺跡に向かった。火山灰土層の断面は、冬期間凍りついたり溶けたりを繰り返して、表面が崩れ落ちている。そこで土の中に埋もれていた石器が顔を出して見つけやすい。このとき8点石器が見つかった。次の土曜日出土した地層や出土状況を確認するため鎌田・藤村に連れられ土壌学の先生と遺跡に赴いた。いつものように藤村が地層断面を削り始めた。数点の石器が断面に並んで出た。目の前に出ている石器は火山灰土層断面の一定範囲から点々と並んで発見された。わたしはこの重大な発見に立会い、背中に戦慄が走り、やがてこの光景を茫然と眺め気が遠くなっていくようだった。これまで学会で戦われてきた「前期旧石器があるないの論争」に終止符が打てる石器と確信し、大陸の中期旧石器文化に相当する確実な資料だと報告した。座散乱木遺跡からでた石器を外国の旧石器に明るい先生や、中国の権威ある先生に見てもらい「シベリアの 中期旧石器に似ている」と太鼓判を押された。このころのわたしは、強い感動とともに発見の成果を信じ込み、懐疑的に物事を見る冷静さを失っていたのかもしれない。

捏造するためには、どの地層にどのように、どんな石器を埋めるのが適当かについての知恵が必要である。藤村はたぶん、論文の層位図や石器実測図に目を通し、談話会などの勉強会に参加し、周囲で語られていた議論や雑談を聞いていたに違いない。われわれは発掘現場や宿舎でその日の成果や今後の見込みなどについて絶えず議論しあっていた。地層断面を眺めながら「このあたりが 火山灰土層の境目 旧地表面だろう もし石器が出るとすれば この辺じゃないか」こうした専門的評価、解釈、議論を聞いていたのだろう。そして地層の古さや石器に関する情報をキャッチし、つじつまの合う捏造工作を行って裏をかいていたと思われる。すでに旧石器が発見された遺跡として知られていたところかその周辺を選び、自分が埋め自分が抜き取ったと告白している。掘り進んでもなかなか石器が出ない、そこに藤村が参加し前夜祭がおこなわれる。そして発掘現場で藤村が「でたど〜」と勝どきを挙げ、大発見となる。その夜は祝勝会となり、記者発表、知事、市長、大物研究者の来訪で座が盛り上がる。作文も十分にできない、考古学的な知識も少ない藤村がひとりで捏造というような複雑で難しいことをやれるわけがない、あの純朴な藤村が悪いことをできるわけがないと思っていた。ちなみに日本最初の旧石器を発見したのは石器マニヤの相澤さん、このヒトは東京国立博物館の守衛さんだった。

9月16日から9月末まで二週間の展覧会がいよいよ近づいてきた。むかしは年に2回の展覧会「なんてことはない」というように難なくこなしていたが、「ちょっとあせりますねえ」なんてセリフがでてくる昨今、なにごとものなんとなくスローモーな体質になってきた、昔のように次の作業の段取りを考えながら先手先手と手を打っていくなんで芸当ができなくなっている、ひとつが終ると「さてつぎはなにをするかな」次の作業までしばらく時間がかかるややもすると休憩まで取ってしまう「やらなければ」というような切羽詰った作業がしたくなくなってしまう、「ゆっくり以降よ」というような体質になってきているのかもしれない。

茨木市のギャラリー、市立川端康成文学館に併設されたギャラリー、天井が高い、石張り、清潔、きれいといいところがいっぱい、なんをいえば観客動員数が少ない、市役所から少しはなれた桜通りに面しているがややさびしい場所にある。茨木市のことでいつも自慢するがこの桜通り、昔まだ茨木市の中心部が田園地帯だった時代、といっても50年ぐらい前のこと、農業用水路が茨木市街地を横断する形で流れていた、水路といっても両側に土手がある川だった、野球場ぐらいの大きさのため池もたくさんあった。その水路のまわりの農地が無くなったということで埋め立てたい遊歩道と車道を作った。30年40年経って遊歩道には立派な大木が葉を茂らせ桜の木が植えられている。市街地を端から端に通るこの遊歩道は「見てください」「歩いてください」「森林浴をしてください」と自慢できる立派な森のような緑地帯になったといつも思っている。ただこの通りの名「桜通り」「川端康成通り」と役所を挟んで二つの名があるそうだが、これには賛成できない「桜通り」でいい、「文学は文化は 個々人の心のうちに あればいい」オレはそう思うがいかがですか。川端康成は福井という市街地から3.4キロぐらいの山間部に住み茨木高校に通ったそうだ。館にはその当時の住まいの様子、茨木高校時代の茨木の様子、後々の文学作品のことなどが展示されている。9月に文学館展示室横のギャラリーをお借りしての展覧会。市の施設なので売買ができない、見ていただく、見せるという姿勢の展覧会です。新しい絵を描かないといけない、案内状・チラシなど印刷物を作らないといけない、看板をつくらないといけない、ようじがちらちら目の前を左右する。

「同級生の杉田君が亡くなった」「残念だ 寂びしいことだ」「訃報のお知らせ みんなが見れるように インターネットでながして」鳥原君から一報がはいった。式場のサイトを開き住所、地図等を入手。メーリングリストに、姓名通夜葬儀の日と時間、喪主名、会場住所・電話・地図などを載せて流した。逆瀬川、地名は知っているが、たぶんあの辺りと想像はつくが、行ったことがない場所なのでパソコンで路線を検索した。阪急電車十三駅で乗り換え西宮北口でまた乗り換え逆瀬川までほぼ1時間足らず、宝塚経由で行くと10分ぐらい多くかかるようだ。通夜が始まる少し前に席についた。10人の仲間が来ていた。何年か会っていなかった、顔が少し変わっていた、はにかみながら笑いながら温厚で誠実な人だった。10人の仲間は車が半分電車が半分、式が終ると立ち話をして分かれた。70歳に少し前のわれわれ「これから こんなん おおいやろうね」とつぶやきながら解散した。

「吉谷さんから 電話が かかってたよ」帰ると一声。二日後に布施・吉谷・岡村が水島宅に行くことが決まっていた。この3人は幼友達、八尾で中学校時代まで近所の悪がき連で遊んでいたそうだ。ひとりには染色やさんに、一人は彫刻のブロンズ屋さんになっている、天王寺の美術研究所でデッサンのいろはを学んでいた、吉谷はついでに遊びに来ていた。「土産のこと、足のこと」電話の向こうの吉谷、いつものくぐもった声「土産はそれぞれで持っていこう」「飯の後は 散策はいや 5分も歩くの いや」「酒は飲まんか やめとくか なら もっていかない」酒好きの彼、昼間の食事でもいっぱい飲みたいのだろうがオレ以外皆さん飲まない、皆さん車だし、ということで「それじゃ 楽しみに」と電話を切った。翌日、布施から電話があった「吉谷が救急車で運ばれ緊急手術 奈良行きは中止 奈良に伝えて それ以上のことは わからん」「・・・」啞然とした、驚いた、酒の話をしていた彼が・・・吉谷とはしばらく会っていなかった、そんなに弱っているダウン寸前だとは思もしなかった「車で行くのに 酒のことばかりいって・・・」ぐらいに思っていた。それから1週間、入ってこない情報を整理すると、救急車で運ばれ緊急手術は、腹痛が大動脈の破裂かなにか。3時間の手術でICUに入ったが心臓が止まる、家族が何度も呼ばれる、心臓動脈壊死でまたステント手術。「峠は越えたが身体ががたがた まだまだ山はあるが 一つ一つ超えていこう」ということらしい。本人は呼吸器がいやだとかで取り外そうとするので、睡眠薬、手袋で拘束、まだICUらしい。

展覧会前、「いい絵を 仕上げたい メインのいい絵を なんとか ものにしたい ええい どうにもならないね」なんて右往左往しながら 60 号の正方形を横にふたつ並べた大きな絵と格闘してきた。最近はこの大きな絵は久しぶり、20 号 30 号ぐらいの大きさ、片手で持ち上がる大きさサイズばかりを描いていた、収納にもいい、在庫にもいいと考えそれより大きな絵は描かなかった。今回しばらくは毎日この絵と向き合った、「昨日よりはましか」「昨日より悪くなっている」「描きこんだら 新鮮な 最初の味が なくなる 描けば描くほど 新鮮味が薄れる」「重くなってきた」「やや いい感じが でつつ」なんてひと筆にひと色に一喜一憂していた。展覧会前のこういう緊張感がいい、気持ちが高揚する、ひと筆が冴える、ひと色が鳴り響く、「これでうまくいきそう」「だんだんいけてきた」「まさかこの色で」「やった あがった うまくいった」芸術作品製作とはこんなものですぞ、アニメのセリフのようにひとコマひとコマ上がったり下がったりしてすすんでいきます。いつものセリフだけれど、いい絵ができあがると「嬉しいかぎり」とつぶやくことにしている。今アトリエに数人の方が絵を描きにきておられる、「こんな進め方はいかがですか」とむかしは口で説明し、紙に鉛筆でスケッチをして見せるというようなやりとりで進めていたが、言う方と聞く方のギャップが大きい、言葉では説明しきれない、言葉では解釈しきれない、ならばこんな描き方、ならばこんな色と形とで筆を取ってキャンバスに描いてしまう、ヒトの絵をさわるのはよくない、オレが描いてどうする。こんなときに登場するのがパソコン様。まず絵の写真を写し、モニターの上に絵を出す、ほとんど同じ色と形を再現する、そこに筆を入れるようにパソコン画面に色を形を描いていく「こういうふうになおしたかった」パソコン画面のプリントアウトをお見せすることで成功している。この方法を自分自身に取り入れたことがなかったが今回やってみた、「うまくいかない これはだめだ」という状態の写真を取って、パソコン画面で描いて「こういう風になればいいか」と絵を描き進めまた写真を取ってパソコン画面で描いて「こういう風になればいいか」というような作業を 10 回ほど繰り返した。成功した、まさに「嬉しいかぎり」この方法は秘密の技法ですぞ、がはは。

前回の吉谷の話の続き：1 週間以上彼の状態がどうなっているのかわからない。想像するに、ICUにまだ居るのかももうでたのか、いずれにしてもベッドで寝たきり、ほとんどの時間を眠っている、食っているものも極病人食、小便にも散歩にも行けていない、というようなことではないだろうか。

二十歳代から彼とはよく遊んだ、遊んだ後はいつもいつも酒になった。酒が好きだった彼、飲めば大いに語っていた。なにをいっていたのかほとんど忘れてしまったが、文学が好きでよく本を読んでいた「小林秀雄にだまされ続けてきた」「交差点で 檻樓を纏った野良犬が 大見得を切っている」「ランボーがすごい しかも晩年は 商売人になった」こんな話が思い出される、オレは小林秀雄は全く読まなかった、ランボーもちょっと読んだけれど、染まなかった、彼は、2.3 点の詩も書いていたが、創造は好きでないのかそれ以上筆は取らなかった、酒の席で語りっぱなしだった。乱暴な酒で、酔うと友人に家族に迷惑をかけた、教訓をたれ自説を強調した、そういう強引で力強い彼の生きかた考え方がうらやましいと好きだった、好きだった半面ひと晩話すとあくる日は別れてひとりほっとせいせいとしていた。「健康なんて 幸せなんて くそ食らえ」といっていた姿が目浮かぶ。そんな彼の今の姿は見たくもない、といえば残酷だろうか。情け容赦がなさ過ぎるだろうか。今の近代医療、少々のことでは人は死なないようだ。大動脈やら心臓血管壊死と聞くと「もうあかん」と思うのは 10 年 20 年も前の話かもしれない。ただあの彼が「生きつづけたい」と思っているのだろうか。

「今 危篤やったけれど 今 亡くなった」「・・・」これを書いている時に一報が入った。「会いにききたい」と思った。安威川で汗を流し、着替え、彼の家に向かった。ICUでも呼吸の管がはずされるといつものように悪態をついていた、嫁・息子・娘と仲良く話していた、それをきいてほっとした。闘病も短くやつれた感じはほとんどない、むしろ廻りの我々が病人のようだ、これまたほっとした。「娘が赴任先の仙台から帰ってくる これはみたくない」みんながそう思っていたが「おとうさん よう がんばった」とひと声、後は笑っていたのには救われた。「明日も明後日も来るやろ」いくちゃん「うん」

タイムトラベルの話がパソコンの中にあった。あらゆるタイムトラベル理論は“親殺しのパラドックス”という巨大な問題と対峙しなければならない。親殺しのパラドックスとはタイムトラベラーが過去にいて自分の親を殺した場合、自分もまたこの世に存在することが不可能になる、自分が存在しなくなる。自分自身が存在しないのだからタイムトラベラーにはなれない、という矛盾の話だ。これに対して物理学者のD先生は、無限の平行宇宙が存在する、量子論と絡めてこの矛盾を避ける理論を提唱する。

内容はちんぷんかんぷんだけれど、映画の世界でよく見る過去へのタイムスリップ、物理学からでた話、単なる物語ではなく学問だったのかと驚きはしないが先生方も面白いことを考えるものだ。先日も時空という話の中で、空間は存在するが時間は存在しない、時間なんてないのだという先生がいた、これも論理的にはなにがなにやらさっぱりわからないが、だてにえかきをやっている、空間のことなら少しはわかる。これは空間というより“世界というか”“場所というか”その存在が空間、そんな空間は確かにある。そこのどこかにオレがいるかもしれないし、いないかもしれない。いようがいまいがその空間はあって、その都度なにかが存在する。存在するものは想像できるようなあらゆるもの、そんななかのなにかがそこにある、それだけでいいのではないか。なにかが存在する場所がある、それが空間、そこには時間がない、ちんぷんかんぷんだけれどきれいにおさまった、これでいい。

二千年以上前の中国の孔子やら老子、荘子やらが書き残した話を、昔から日本の大先生は“教え”“教訓”としてとらえ、これを朗々と暗唱できるようになれば一人前だというような教育をしてきた気がする。“教え”“教訓”は今読んでも「なるほど すごいいいことをいっている」とは思うのだけれど「これだけではないでしょう」「もっと 考えることがあるでしょう」とも思ってしまう。

#### 「天地自然は長久」

老子先生は天地自然と一体になって、おおいなる力を自由自在に行使してその本懐を遂げる。  
と本当にそういう意味で言ったのか、もっとかって気ままに読んでみたらと自由訳をかってでた。

宇宙も、大地も、その空間に時間はない。時がない。宇宙がある、大地がある、とは誰が知っているの。宇宙や大地には、今がないから、わたしも、君も、どなたも、いない。わたしも、君も、どなたも、いるのだけれど、その時、その瞬間、それを頭のなかで描かなければ、そこには、な～んにもない。

「名を鵬と為す 鵬の背 幾千里 鵬 南方に飛ぶ 海上の波風 三千里 一息に半年かけて飛んでいく 地上では塵芥 さまざまな生き物が 生活している 空は蒼い 遠くからこちらを見れば 蒼いのか」

荘子先生は鵬の大きさを無限大の大きさと表している。半年間飛び続けるのは時間の常識を超える。時空がないということであらわしている。これもおかしな解釈だねえ。

これも、我輩の自由訳で：でっかい鳥がいる、鳥なのか空なのか、空なのか鳥なのか、飛んでいる、いつも大空を飛んでいる、雲のように、青空のように飛んでいる、行ってしまったかと思えば次の鳥がやってくる、また行ってしまいがまたやってくる、毎日毎日大空には鳥がいる。地上には、私も、君も、牛馬も、川も、森もある。毎日毎日、地上には、私も、君も、牛馬も、川も、森もある。毎日毎日、大空がある、地上がある。空は蒼いなあ。こちら蒼いなあ。

こういように読んでみると、これは詩だ、歌だ。“教え”“教訓”として読むとみように重々しくつまらないが、歌なら楽しい、おもしろい。

吉谷純和が亡くなってちょうど一週間。「ICUに10日間も入れられていた あの部屋にひとりでいるのはつらい かわいそうだ 無駄な時間だったかも」「ICUで10日間も ようがんばった 家族で話げできた あのなん日かがよかった」10歳代からあれやこれやと付き合いってきた、家族みんなが付き合いってきた、ぽっかり穴が開いた。

救急車、高度医療、医療費こんなことが頭をよぎる。オレは直行で斎場がいい、家族だけでいい。それより残った絵のことを心配しなくっちゃ、これは粗大ゴミか、わがままの塊りか、ほんとたくさんある。

今日は山に登る予定だったが雨で中止になった。この天候の変化、いわゆる天候不順というやつで、梅雨明け宣言が出、晴れマークが並んでいたと安心して出かけ帰ると「明日は雨模様」という天気予報に変わっていた。一週間前に台風が来た、いつものことだが大阪にはほとんど台風がやってこないというのか、台風が目が通過していても風が多少吹くだけというような状態がいつものようだ。「台風接近」の一報を聞き雨戸を閉め多少のバタバタ風をやり過すともう終っている、過ぎ去ってしまったということが最近が多い。子供のころには大阪にも台風が来た、大阪市内の海沿いが浸水し避難というようなことが何度かあった。台風が来るというのでガラス窓に板を打ちつけ畳をめくり上げガラス窓に当てている父親の姿も覚えている。当時の住まいは大正ロマンの洒落た社宅だったが雨戸はなかった。

一週間前も台風が近くを通過しそう、このあたりも暴風雨圏内に入りつつある、半日ぐらいは雨と風が暴れまわる、「いよいよ台風がやってくるか」雨戸を閉め通過予定時間が過ぎたが、パタパタという風の音を聞いたただけだった。ただ雨はよく降った、降り止まずにずっと降り続けた。「これだけ降れば 安威川 河川敷を超え土手の中間ぐらいまでは 水が上がってきているだろう」年に 1.2 回の大雨の後には堤防の半分ぐらいまで水位が上がり濁流が勢いよく流れる。ほぼ一日経ったころには河川敷の水は引いているが、杭やら看板やらの突起物に草やゴミが絡まり河川敷の舗装上には上流から流されてきた土砂が積もっている。この土砂も阪急・JRの上流部分はこぶし大の石ころ、もっと大きなやつもごろごろしている。それより下流は砂がほとんど、ところどころに石ころが転がっている。

台風が去った翌日は朝から陽が照り、「梅干を干そう」とダンボールを広げ並べた、太陽はぎらぎら輝いていた。この天気が一日つづいても安威川の河川敷は冠水でだめだろうといつものように自転車で出かけた。まだまだ河川敷の上を1メートルぐらい越え泥色の水が流れていた。「たぶん今日は冠水している 河川敷には降りられない」と思いながら階段を上がり水を見てそのまま降りた。「今日は淀川まで足を伸ばすぞ」と自転車を走らせた。「三島江」にするか「鳥飼上」にするか迷いつつ鳥飼上の土手を上がった。淀川のキャパは大きいのか仮設のゴルフ場の芝には水溜りはあるが、本流の水は流れ込んできていない、増水しているのか、濁っているのかもわからない、「本日 ゴルフ場は 営業していません」の看板が土手の入口の柵にぶら下げてあった。

上流に向かうか下流に向かうか迷った末、下流に向かったのが失敗だった。これから今日の本筋、大きな川の堤防は土でできている、土を積んだだけだ、コンクリートブロックは芝生同様に斜面が崩れないように貼ってあるだけ、水嵩が増えれば土手の土が水を吸う、吸い込んだ水を天気がよくなった翌日から勢いよく土手の左右に水が流れ出す、どうもその水量は下流の方が多いような気がする、河川敷の舗装の上にたっぶり水が溜っている。これは下流の方が土手が吸う水の量が多いからなのかな、それともオレの一人合点の勘違いかな。もうひとつ気づいた事がある、川は蛇行する、くねくねと蛇行する、いつもよくいうのだけれど“地球の形”とオレはいうのだけれど、地球表面の形、山があつて川があつて、池があつて田んぼがあつて、島があつて入り江があつて、こういう普通の形、飛行機から、鳥の目から、小高い丘の上から見つめた形をオレは“地球の形”と呼んでいる。オレのいう地球の形というのはすべて水があるからできているのだと思う。山から流れ出た水は川となって海に流れるが、素直にすつとは流れない、好きなように方向を変え右え左えときには一回転までして奇妙な形を作る、と想像していたら次の時には別の方向に向かっている。安威川もその約束事にたがわず、右へ左へ曲がりくねって海に向かっている。今でこそ大きな機械を使ってでっかい堤防を作ったからその方向に“次の時”はないけれど、こんな不自然なことをしていたらそのうち、自然と大きな災害がやってきそうな気がする。濁流の勢いがついた水が時計回りに曲がる時には左側に土や石ころを落す、反時計回りに曲がる時には右側に土や石ころを落す、これであっているのかな。また濁流の勢いがついた水が時計回りに曲がる時には、土手が吸い込む水も左側の方が多いのかな。こういうことは土木やさん、川の専門家なら知っている当たり前の簡単なことなのか「そんな難しいことは 土木やでも わからんぞ」というようなことなのか、これは知らない、土木やさんのつぶやきも聞いてみたい。いずれにしても簡易舗装の河川敷、大水の後の土砂や瓦礫の堆積はそう簡単に取り除けられない、何ヶ月かあとになって市役所か府役所がショベルカーできれいにするのか、それまでは歩きづらい、走りづらい。水溜りもいつまでもぐずぐず水がじわじわもれ出ている。これが地球の形の始まりか、不自然な土木工事のゆがみか・・・今年もキヌチャンチノかんなが咲いた。

今回の山、二度も順延になった、一度は吉谷の死、一度は台風による天気急変、やっと実現した三度目の正直ではありませんが、またまた昨夜の予報で雨マークが急遽現れた。今回も台風、4.5日前から台風12号が太平洋にあり、いずれにしても関西に近づきつつあるという情報はわかっていたが、天気予報はずらり晴れマークが並んでいる、台風情報もあったがむしろ高温予報、熱中症注意が並んでいた。前回急遽中止の時も晴れマークが並んでいたが前日の夕方になって突然傘マークが現れた、これに懲りて台風接近の場合は天気が急変すると予想していた、ずらり並んだ太陽マークがいつ崩れてもおかしくないと思っていた。前日の朝天気予報をチェックした時点では曇りマークが現れ、出発直前のチェックで傘マークが現れていたが、「ええい 雨もまた よし」と出発した。

今日は1年前の逆、「時計回りにぐるりと歩きましょう」草原を30分も進むと「わらび採る先にいって」なるほどわらびがある、午前10時の太陽がざらざら、遮るもののない草原の斜面、元スキー場のなだらかな斜面「じゃオレも」と幾ほんかちぎった、「楽しいでしょう」「わらびを採ると夢中になる」そういう感覚は、楽しさはわからないがすぐに片手いっぱいになった。2年前「来年は絶対わらびを採りに来る」と宣言されていた姿を思い出す。立っているだけでも暑い、汗がだらだら流れてくる、30分ぐらいで袋いっぱいになった。「お待たせ これで十分 おいしいよお」少し上がったところから木が生えている、小休止、木陰では涼しい風が吹く。

登り始めた、樹林帯の中、台風が来ていなければ真夏のざらざら太陽のはずだが、西日本は曇り気味、東日本は35度超えの猛暑日だそうだ。曇っているとはいえ、なだらかとはいえ、登りが続く、汗が流れる、シャツも帽子もズボンもぬれだした、30分に一本休憩をとって何かを食べ水を飲んだ、塩飴もいただいた。1時間ぐらい過ぎたあたりから自然林が杉か檜の植林地帯に入った。あまり手入れはされていないが立派に育ち切りごろ「いつでも材木に使ってくれ」立派な太い木が乱立している。木陰があるので涼しいが、汗は相変わらずに流れる、着ているものは絞ればしたたるぐらいにぬれてきた、暑さが体力を奪う、上の方に空が見えてきた、間もなく峠だ、のっこし（乗越し）だ。

シャワシャワシャワ「ひぐらし」だという。昔からせみの鳴き声の区別がつかない、「せみが鳴いている」としか言えない、「あれは何 これは何」と皆さんがおっしゃるがオレにはわからない、これは子供のころからだ。

「まだ？」「まだ？」といわれつつ12:30寒風峠（かんぷう）に着いた、上がってきた。琵琶湖が見える、麓のマキノが見える、黒い緑の森、浅い緑の田んぼ、黒い川、土色の道、涼しい風が吹き上がる、向こうが大谷山、反対側には鉄塔がその向こうが赤坂山、シャツを脱いで風に当たる、気持ちがいい、ザックに入った新しいシャツに着替えた。男ばかりのやま山は、もくもくと弁当を食うが、女の人たちは敷物を広げ「これを食べて」「これも おいしいよ」といろいろ別けてもらえる旨さありがたさ。“しょうがをワインで煮たもの”“きゅうりに塩をかけただけ”“だしまき卵”“冷たいトマト・グレープフルーツ・すもも”オレも負けじとコーヒーのことは考えた末、テルモスの中に粉をいれ茶こしを使ってコップに4人分わけた、これが一番簡単、荷も軽い、それでも旨い。

「あれえ これは ブナ ブナの木だ」細く低く曲がりくねって生えそろっている、冬の吹雪でこんな形になっている、こんなブナの木々の群生も珍しい、しかもなかなか美しい、若々しい。オレはこの尾根道がお気に入り、冬は厳しい吹雪の道だろうけれど、それ以外の季節はほっとする周り全部がぐるりと見渡せる、右にも左にもふらり散歩ができそうに広い。琵琶湖と日本海が同じくらいの近さに見える、琵琶湖川から登ってきたものには琵琶湖は当然そこにあるが「アレレ あれは海 あれは日本海 見えるのだ 同じぐらいに近い」おだやかな上り下り、マキノ方面を見るといつもいっている“地球の形”その美しさが眼下にありあり。その美しさを皆様にお見せしましょう、描いて見ましょう。山があり、山のすそ野に沿って川が流れ、その横に道が作られ、平らなところにそれぞれの形の田んぼが作られ、平らなところにも森が小山が池がある。

今回は相・前・久・岡の4人でやってきた。7:30茨木IC マキノ駐車場9:30 10時登山出発 ぐるり時計回りで降りてきたのが4:30 天気予報どおり午後は曇り、下山1時間前からポツリたちまち雨に。そのまま風呂に直行。65歳以上はシルバーサービス日で600円。証明書の無いお二人は700円。茶カテキンボディソープで洗うとぴりぴり気持ちがいい、ここは温泉だそうだ。車はマイカー「たまには動かさないと」と出したがハイブレード車に比べ燃費は倍だそうだ。途中眠気覚ましの小瓶を買ってもらい帰阪。いつものように居酒屋へ。